

蓮井元彦
『for tomorrow』
(リブロアルテ/
2020)



1983年生まれ。2003年渡英、写真を学ぶ。
2007年帰国。国内外の雑誌や広告などで活動するほか、作品制作を行なっている。

草野庸子
『Across the Sea』
(roshin books /
2018)

鈴木育郎『解業』
(赤々舎/2015)

1985年生まれ。薦職をしながら全国を巡り、日常を撮り続いている。「キヤノン写真新世紀」グランプリ受賞。手製本の私家版写真集を多数制作。

草野庸子の背景には、父親を知らずに生きてきた喪失感が行き来する。友人たち、仲間たちとの幸福な一瞬を写真に残すのは、なかつたことにしたくないというほろ苦い感情だ。蓮井元彦が『for tomorrow』で写した淡々とした日々の光景。その集まりにほの見える、蓮井自身の孤独を抱えたとりとめのなさ。それがモノクロームの画面の中に、うつすらとした希望を携え漂う。木村和平は新作『あたらしい窓』で身近にいる人が遠い存在に感じてくれる。その変化と流れを軸に、ごく身辺の大切なものに目を向けている。

1993年生まれ。桑沢デザイン研究所卒。在学中「キヤノン写真新世紀」で優秀賞に。近ごろは自身のルーツを振り返る新作に取り組んでいる。

真映えのしないものばかりが無造作に投げ出され、不安定に揺れるリアルが横たわっている。家族に障がい者がいて、生まれながらの境遇のため祖父からやら将来に対し強いバイアスをかけられる。思春期から続くトラウマは低空飛行の日々の中に沸き上がる感情とないませになり画面に投射される。スナップショットは写真で目の前の世界を考える基本だ。石毛はそこに自分の鏡的なものを投射し剥き出しの感情がそのまま画面の光景に反映され、見る者の心に何かを落としていく。

街と人との 関係を撮る

真だからできることは何か」という問い合わせや見せ方を示さねばならないのか? そもそもが写真(スナップショット)なのに?

鈴木育郎から直接アドバイスを受けた。私家版写真集を活動の軸とし、ありのままの自分の眼を時々にまとめてしまうのは鈴木直系のやり方だ。特にテーマを設げず鏡的な視線で世界に向かう石毛に、作り続けながら考えていく道を示したものいえる。

鏡的なスナップショットの撮り手としても現在印象深い他の写真家を紹介したい。以下の3名はいずれもカルチャーやファッショントートレードの仕事で活躍著しい存在だ。

「写真は写真」

隨
寫

ジョン・サイパル『隨写』
(禅フォトギャラリー／2018)

1979年生まれ。2004年、ネブラスカ大学卒業後来日し、精力的に個展を開催。10年からトーテムポールフォトギャラリー加入。2012年より現在まで「隨写」シリーズでの作品を発表。

鶴巻育子『夢』
(私家版/2021)

1972年生まれ。世界20か国、40以上の都市を訪れスナップを撮影。広告、雑誌ほか幅広く活動。写真ギャラリー「Jam Photo Gallery」主宰。

木村和平
『あたらしい窓』
(赤々舎/2021)



1993年生まれ。ファッションをルーツに、雑誌、広告、映画の撮影などで活躍。写真集、展示、仕事で一貫した精細な美意識を見せる。